

明治古都館と正門

明治古都館の特徴的な赤レンガの外観は、かつては帝国京都博物館として知られていた当時の博物館の本館でしたが、過ぎ去った時代を堂々と思い出させます。1897年に完成したのは、国立博物館の概念が日本に紹介されたのはごく最近のことです。現在、耐震改修の準備のために一般公開されていませんが、この建物は京都国立博物館の議論の余地のないシンボルです。

この建物は、英国の建築家ジョサイア・コンダー（1852～1920）の主要な作品であり、西洋建築を日本に紹介した片山東熊（1854～1917）によって設計されました。片山は皇室に雇われ、赤坂宮殿（国宝である国会議事堂）や東京国立博物館、奈良国立博物館の主要な建物の設計を担当しました。片山は、ガラスの天窗を備えたスレートタイル張りのマンサード屋根で、フランスルネッサンス様式の建物を設計しました。インテリアは3,000平方メートルをわずかに超え、2,000平方メートル以上が展示スペースに充てられています。フロアには、ホワイエと、エジプト様式と呼ばれる柱が配置されたエレガントな中央ギャラリー、中央の3つの中庭を囲むさまざまなサイズの展示室10室が含まれます。正面入り口の上には、芸術に関連する2つの仏教の神々の画像が並ぶ菊の紋章のペディメントがあります。博物館の敷地の西側にある元の正門は、正門としては使用されなくなりました。1895年に建設されたその華やかなスタイルは、かつての本館のスタイルと一致しています。精巧な鉄の門には、かつてチケット販売などのさまざまな機能を果たした赤レンガの小さなドーム型の構造が2つ並んでいます。門からは、西庭と明治古都館の壮大な景色を背景に、なだらかな東山の丘を眺めることができます。

明治古都館と旧正門はともに1969年に重要文化財に指定されました。